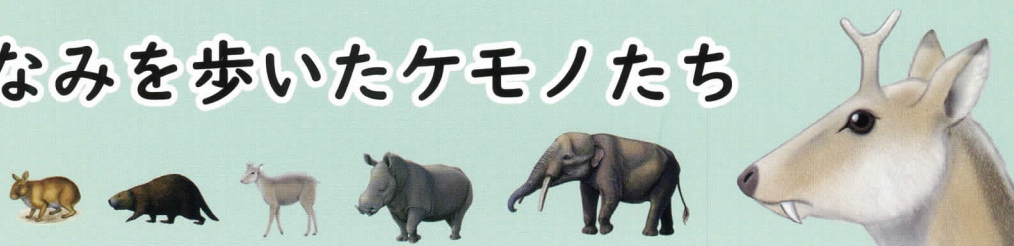


太古のみずなみを歩いたケモノたち 展示解説



はじめに ～瑞浪の大地を歩いていたほ乳類たち～

瑞浪市とその周辺の 2000 万年～ 1500 万年前の地層である瑞浪層群からは、主に海に生息する生物の化石が見つかることが知られています。しかし、実はこのあたりには湖の地層も広がっており、陸に生息していたほ乳類の化石も見つかっています。また、浅い海に堆積した瑞浪層群明世層からも陸から運ばれたであろうほ乳類の化石が時々見つかります。本展では、瑞浪を中心にこの周辺から見つかったほ乳類化石を紹介します。



1800 万年前の瑞浪市周辺（陸上）の様子。

アンネクテンスゾウ ～下アゴにもキバが生えた小さなゾウ～

最初に紹介するのは下アゴにキバが生えた全長 2 メートルほどの小さな古代ゾウ、ゴンフォテリウム・アンネクテンス（アンネクテンスゾウ）です。ゴンフォテリウムのグループは、約 1800 万年前には西はスペインから東は日本までとユーラシア大陸の端から端まで生息していました。下アゴにあるキバ（切歯）で草を掘り起こして食べていたと考えられています。

瑞浪市周辺では、御嵩町から頭骨が発見されており、この化石は当館に収蔵されています。また、瑞浪市山田町からも下アゴの一部が、明世町からはキバの一部が見つかっています。

展示する頭骨は、ゴンフォテリウム・アンネクテンスのホロタイプ（新種を決める基になる化石）であり、大変貴重なものです。



アンネクテンスゾウ 復元図



アンネクテンスゾウ 頭骨



アンネクテンスゾウ 左の頭骨の裏面、歯が並んでいる

初公開！

◆原始ジカ ～短い角を持った原始的なシカ～

2019年4月下旬、瑞浪市内では哺乳類の化石が発見されました。発見された部位は、頭の一部、上アゴ、下アゴの一部、体の骨（主に足）、そして二股に枝分かれした角です。角を持った動物は、シカやウシ、キリンなどが知られていますが、枝分かれした角はシカの特徴であり、角の発見によりこのほ乳類化石がシカ科であることが判明しました。このような二股に枝分かれした角を持ったシカの化石はヨーロッパからも見つっていますが、アジアではこれが初めての発見であり、また日本最古級のシカ化石とみられます。

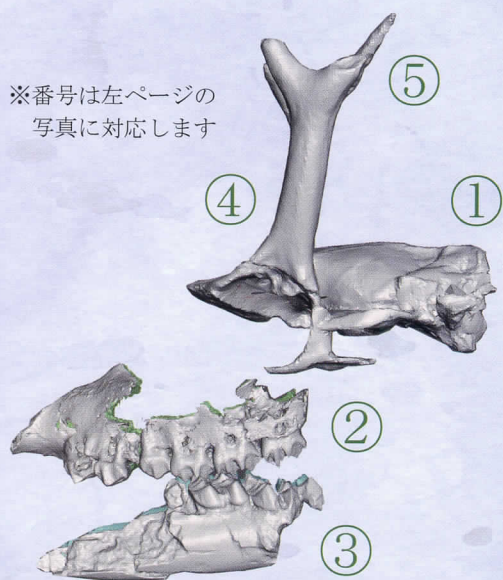
シカ科の現生種は、角の根本に角座（頭と角の境にある出っぱり）があり、角座よりも上の部分が毎年生え変わりますが、このシカの角には角座が無く、角が生え変わったかどうかはわかりません。しかし、現在のシカとは姿も生態も異なる原始的なシカであったようです。このシカは、頭骨や歯の特徴がヨーロッパ最古のシカとして知られるプロセルブルスとよく似ています。しかし、瑞浪産のシカは成獣にもかかわらず角の長さがプロセルブルスの二分の一以下と非常に短いことから、プロセルブルスよりも祖先的な段階である可能性が高く、現在新種のシカとして研究中です。なお、仮の名前としてこのシカを原始ジカ（ゲンシジカ）と呼んでいます。



頭の骨をコンピューターで復元

見つかった頭の骨は左ページの写真のようにバラバラでした。そのため、各部位を3Dスキャナーで三次元化し、コンピューター上で復元しました。

※番号は左ページの
写真に対応します



頭部の三次元画像



復元された顔

明らかになった原始ジカの姿

見つかった骨の各部位を調べた結果、以下のことが明らかになりました。

- ①全長 90 cm、肩高 60 cm、体重 20-30 kg
- ②サーベル状の犬歯が生えている
- ③二股に枝分かれした角は目の真上に伸びており、角座が無く角全体が毛皮で覆われている
- ④目の前方に大きな眼下腺（臭腺）があり、現在のシカと同様にマーキングをしていた

これらによって原始ジカは右のイラストのような姿であったと考えられます。



原始ジカ 復元図

他にもいたシカの仲間たち

原始ジカ以外にもシカに近い動物の化石が瑞浪市周辺で見つかっています。ミノジカは大型のほ乳類で、部分的な骨の化石しか見つかっていませんが、キリン科に近縁なパレオメリクス類の一種と考えられています。

また、原始ジカよりも小型のシカも市内からみつかっています。瑞浪層群と同じ時代の地層からは、原始ジカと同じくらいの大きさで、ウシ科に近縁なアンフィモスクスという動物も発見されています。

かつては、どれも“シカ”と呼ばれてきましたが、今後も新たな化石が見つかり研究が進むことで、太古の瑞浪を歩いたケモノたちの姿を復元できるようになるかもしれません。



ミノジカ 下アゴ

ミノカスター ～日本にもいたビーバーの仲間たち～

可児市の木曽川河岸に露出する中村層からは、多くのビーバーの化石が見つかっています。全長 50 センチで今のビーバーとほぼ同じサイズであり、外見に大きな違いは見られません。しかし、臼歯の歯冠が今のビーバーよりも低いため、木の実を主食にしていたと思われます（今のビーバーは、水草や水辺の木の枝や樹皮を主食としています）。

見つかった化石は新属新種であることが判明し、2016 年にミノカスターと命名されました（「ミノ」は美濃地方にちなんで付けられました）。現在ビーバーの仲間はヨーロッパと北アメリカのみに生息していますが、1800 万年前は日本にも生息していたのです。



アロプトックス ～海辺にいたナキウサギ～

アロプトックスは、土岐川河岸に露出する明世層から発見されました。歯のかみ合わせ部分を調べたところ、ナキウサギの仲間であるアロプトックスと判明しました。見つかった下アゴは大きさが現在のナキウサギよりも大きく、体長も 30 センチくらいあったと見られます（有名なエゾナキウサギは体長 10 ～ 20 センチ）。

ナキウサギと聞くと大雪山にいる愛くるしい姿を思い浮かべる方もいると思いますが、歯の形や下アゴの形状からナキウサギとは異なる外観だったと思われます。



カニサイ ～サイなのにツノがない～

カニサイはブラキポテリウムという絶滅したサイの仲間です。可児市で最初の化石が発見されたことからこの名前が付けられました。カニサイの特徴は角がないことに加え、手足が短く太いことです。最近の学説では半水生とされているため、サイというよりはカバのような外観だったと考える研究者もいます。

また、カニサイ以外にも瑞浪市周辺からはもう一種類、プレシアセラテリウムというサイの下アゴの化石が見つかっており、二種類のサイが生息していたことが明らかになっています。



パレオパラドキシア緊急発掘レポート

2022 年 6 月 5 日に瑞浪市釜戸町で保存良好なほ乳類の化石が発見されました。6 月 10 日に発掘を行ったところ、ほぼ完全な全身骨格であることが判明しました。また骨の特徴から、絶滅した束柱類（そくちゅうるい）の一種、パレオパラドキシアであることがわかりました。発掘成功を記念して、本展では発掘の様子に加え、クリーニングの様子を紹介します。

